

モラルサイエンス研究会（令和2年1月13日）発表要旨

廣池千九郎における穂積陳重—初接触の再考—

伝統文化研究室

主任研究員 橋本富太郎

本研究は「廣池千九郎の伝記的研究」の一環であり、中津時代から続き、今回は前期東京時代に入ったところである。

この時代のうち、本研究の枠組みとの関連の深さから、特に穂積陳重との関係に注目した。まず穂積を論じる意味を明確化し、次に関連の研究史をたどって研究課題を提示したのち、1つ目の課題として穂積との初接触について検討した。

『伝記 廣池千九郎』などでは、その時期は明治30年ごろと見られてきたが、内田銀蔵の関与を軸に再考したところ、明治35年を妥当とする結論が導き出された。

廣池は、穂積の「法律五大族之説」に触発されて法学を志したが、直ちに穂積の直接的指導を受けたいと思っていたわけではなく、学位論文を構想する過程で内田の紹介によって穂積と接触するに至ったと見られる。

このように初めて会ったのは意外に遅い時期となるが、その後の研究交流や人間的感化を考えると関係は極めて深かったといえる。